

高橋 孝 (著)
荒井邦佳 (執筆協力)

胃癌外科の歴史

丸山圭一

国際医療福祉大学教授・胃癌外科，消化器外科/山王病院・外科/前 国立がんセンター外科医長

『胃癌外科の歴史』が刊行されました。胃癌の外科治療にたずさわる医師には、ぜひ読んでいただきたい良書です。胃癌外科の歴史は、Billroth が最初の胃癌切除に成功した 1881 年（明治 14 年）から数えて、わずか 130 年と短いものです。この間の進歩をふり返り、その基礎を知ること、今、胃癌治療にたずさわる外科医にとって大変意味があるからです。

著者は癌研病院外科部長を長らく勤められた高橋 孝先生と、先生が 2009 年 5 月に逝去された後に遺志をつがれた豊島病院副院長の腫瘍外科医、荒井邦佳先生です。本書ではお二人の考え方、すなわち胃癌外科治療の「理論と実践」を歴史からつま

びらかにすることをめざしています。このために、実に膨大な文献・資料を網羅し、多くの図版と図表を載せ、著者の言葉で解説しています。

本書を特徴づけているのは、序文で述べられているように“欧米と日本における手術治療の大きな違いに疑問をもち、欧米と日本におけるリンパ流研究と郭清手術がどのように発展してきたかを紐解いて考察した”ことです。欧米の胃癌外科の歩みは、Péan, Rydygier, Billroth, Mikulicz, Schlatter, Mayo, McNeer and Brunschwig, Wangenstein とつらなり、日本では、近藤次繁、三宅 速、武藤完雄、久留勝、梶谷 鑑、西 満正とつらなっ

ています。リンパ学の歩みは、Poirier, Pólya, Jamieson, Rouvière, 井上興惣一、木田八兵衛と述べられています。

もう一つの本書の特徴は、胃癌外科ばかりでなく、喉頭癌、乳癌、直腸癌など、他の癌でのリンパ流と郭清の歩みとも比較・考察されていることです。癌治療の基礎理論を理解する上で、非常に大切なことに違いありません。ぜひ、座右の書として熟読されるようお勧めします。

●B5/頁 272/2011 年/定価 9,450 円
(本体 9,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-00902-7]

医学書院 刊